

[論文]

スロヴェニア語の **biti** + 動詞不定形構文の特徴——チェコ語の **být** + 動詞不定形構文の視点から——

金指 久美子

はじめに

チェコ語には「コピュラ **být** + 動詞不定形」という構文が存在する。スタンコウスカは、この統語構造は叙法と受動という両方の意味を持ちうると述べ、以下の例を挙げた (Stankovska 2009: 213) ¹。

(1) **Bylo vidět celou Prahu.**「プラハ全体が見えた。」(2) **Hluk z ulice je slyšet od rána.**「通りの騒音が朝から聞こえている。」(3) **Všude byl cítit kouř.**「どこもかしこも煙の臭いがした。」(4) **Na autě bylo těch absolvovaných 1000 km znát.**「車にはその走破した 1000 キロが刻まれていた (わかった)。」(5) **S tím účesem tě bude vždy zdálky poznat.**「そんな髪形をしていればいつだって遠くからでも君とわかるだろうね。」(6) **Přednášejícímu nebylo vůbec rozumět.**「講演者のいうことはぜんぜんわからなかった。」

上掲の例文は 6 つともすべて、叙法のうちの可能 (否定文の (6) は不可能) を表わしている。

リュブリャーナ大学でチェコ語を専攻する学生のために編まれたこのチェコ語文法書はまた、チェコ語とスロヴェニア語という構造の近い同系の言語間の対照研究としての側面をもあわせもつ。スタンコウスカはさらに、上掲のタイプの構文に現れるチェコ語の動詞不定形は知覚を意味する語に限られると指摘した上で、これらの文はスロヴェニア語では通常、再帰受動態構文に訳されると述べている。そして、例文 (1)–(6) に対して以下のようなスロヴェニア語訳を付した (Stankovska 2009: 213)。

- (1)´ a. Celo Prago **se je videlo**.² / b. **Bilo je videti** celo Prago.
(2)´ Od jutra **se sliši** hrup s ceste.
(3)´ Dim **se je vohal** povsod.
(4)´ Avtu **se je poznalo** tistih tisoč prevoženih kilometrov.
(5)´ S to pričesko te **bo mogoče** že od daleč **prepoznati**.
(6)´ Predavatelja **se sploh ni razumelo**.

このスロヴェニア語訳を見ると、再帰受動態ではない文が2例見られる。例文(1)´には、再帰受動態 a. に加えてチェコ語と同様の構文 b. **biti** + 動詞不定形も提示されている。もう1つが例文(5)´である。この訳文に再帰受動態が選ばれなかった主要な理由は、動作の受け手が人称代名詞2人称単数の **ti**「君」だからであろう。チェコ語もスロヴェニア語も再帰受動態の主語、すなわち動作の受け手は原則として3人称に限られる。したがって、例文(5)´をスロヴェニア語に訳すときに **ti** を主格主語として再帰受動態構文にすることはできない。そこで選択された構文が「**biti** + 叙法を表わす助詞 **mogoče** + 動詞不定形」と考えられる。

このように、チェコ語の **být** + 動詞不定形の6つの例文に対して、対応するスロヴェニア語訳は7つ示され、そのうちの1つがチェコ語と同じ **biti** + 動詞不定形という構造となっている。したがって、チェコ語ほど頻繁に出現しないとはいえ、スロヴェニア語にも **biti** + 動詞不定形構文が存在していることがわかる。

本稿は、スロヴェニア語の **biti** + 動詞不定形をチェコ語の当該構文と対照させることによって、その特徴を明らかにすることを目的とする。まず、第1章でチェコ語の **být** + 動詞不定形構文³の特徴を先行研究に従ってまとめる。次に第2章でスロヴェニア語の当該構文の特徴を先行研究から提示した後、前章のチェコ語と対照させて共通点と相違点を整理する。さらに第3章でコーパスを用いてスロヴェニア語の当該構文を収集した上で分類し、第2章における先行研究の調査結果と照合する。最後に、**biti** + 動詞不定形の特徴をまとめて考察を加える。

1. チェコ語の **být** + 動詞不定形構文

チェコ語学では、この構文は述語の形式として、あるいは動詞不定形の用法として文法書で必ず取り上げられる。つまり、標準語の枠内で語られる安定した現象である。そして、大きく分けて意味と文構造の2つの観点から論じられてきた。

1.1. 意味

být + 動詞不定形は、「はじめに」で示した(1)–(6)の例文に見られる「可能」ばかりでなく、「必要性」や「必然性」という叙法も表わしうる。

1.1.1. 必要性・必然性

必要性や必然性を表わす例文として、シュミラウエルは以下の文を提示した (Šmilauer 1947: 107)。

(7) a. **Jest rozhodnouti.**

「決めなくてはならない。」

b. **Všem jest umříti.**

「みんな (必ず) 死ぬ。」

c. **Bylo jim obejít nádražní skladiště.**

「彼らは駅の倉庫を迂回しなくてはならなかった。」

可能を表わす構文と異なる点が2つある。1つは、この構文に含まれる不定形は、知覚動詞に限らずさまざまな意味の動詞がなりうるという点である。そしてもう1つは、必要性・必然性を意味するときは、動作主と与格によって表わすことができるという点である。例文(7b)の *Všem*、(7c)の *jim* がこれに相当する。ただし、このような必要性および必然性を表わす *být* + 動詞不定形は文語的であるとか古風であるとの指摘が複数の先行研究でなされている (Šmilauer 1947: 107, Havránek a Jedlička 1981: 342, PM 1995: 410, Čechová et al 1996: 287)。このことは、例文(7a)と(7b)に現れるコピュラ *být* の現在3人称単数形 *jest* および動詞不定形 *rozhodnouti*, *umříti* という形態からも明らかである。

ボラークは、必要性・必然性を表わすこの構文が古風と受け取られるに至る過程を歴史的に追った。以下のようにまとめられる (Porák 1967: 15–55)。

チェコ語史における最初期、すなわち14世紀から15世紀にかけて成立した古期チェコ語文献にはすでにこの構文が見られ、日常的に用いられていたことがうかがえる。しかし、時を経るに従って徐々に減少していった。

ところが、19世紀前半に急激に増加する。この時代は古い時代に文語の範を求めようとする雰囲気があり、加えてドブロフスキーの文法書が大きく影響を与えたからである。このように、全体としてみれば増加が認められるとはいえ、個人による差が大きかった。過剰ともいえるほど多用するチェラコフスキー、ユングマン、パラツキーのような作家や著述家もいれば、それほどでもない作家もいたのである。日常の話しことばに近いチェコ語で書いたニェムツォヴァーやエルベンらの作品にはあまり出てこないし、人形劇や民衆劇などにも使用されない。すなわち、この時期の必要性・必然性を表わす *být* + 動詞不定形構文には、作家個人の文体を特徴づける働きがあった。19世紀後半に再び減少に転じ、著しく文語的な色合いを帯びるようになる。

20世紀に入ると、文語的と受け取られる度合いはますます強くなっていく。これを逆手にとって、この構文を笑いの要素として用いるユーモア作家もいた。たとえば、登場人物が浮世離れしていることを特徴づけるために、セリフにあえてこの構文を入れ込むのである。

以上のような経過を経て、必要性・必然性を表わすこの構文は現在では古風と見なされている。

1.1.2. 可能

必要性・必然性に対して、可能を表わす *být* + 動詞不定形はチェコ語の中で今も生きている文構造である。必要性・必然性を表わす構文と異なり、決して古風とは見なされていない。文体以外にも2つの点で異なることは前項で述べたとおりである。すなわち、不定形となる動詞は知覚を意味する語に限られる。そして、可能を表わすときには与格による動作主、換言すれば「知覚する人」が現れず、それによって、誰にとっても知覚されるという一般性が表現される。

この構文に出現する知覚動詞として、具体的には次の語が挙げられる。*cítit*「感じる、においを感じる」、*poznat*「知る」、*rozumět*「わかる」、*slyšet*「聞こえる」、*vidět*「見える」、*znát*「知っている」。19世紀前半にこの文構造をとる動詞不定形が飛躍的に増加したが、その後また急速に減少し、上掲の動詞にほぼ落ち着いている (Porák 1967: 64-76)。具体例は冒頭で例文(1)-(6)に挙げたとおりである。これらに加えて、1987年の『チェコ語文法』には「感じる」という意味で用いられる *cítit* の例が紹介されている (MČ 1987: 214)。

(8) *Bylo cítit, že se země chvěje.*

「地面が震えているのが感じられた。」

さらに、トラヴニーチェクは自身の文法書で、動詞不定形に *pozorovat*「観察する」の用いられている例を提示した (Trávníček 1951: 1413)。

(9) *Je tu pozorovat vzornou čistotu.*

「ここでは模範的な清潔さが観察される。」

この *pozorovat* を加えても、上掲の知覚動詞のうち、*rozumět* のみが与格の目的語をとる。例文(6) *Přednášejícímu nebylo vůbec rozumět.* の文頭が *Přednášejícímu* と与格形を取るのは、*rozumět* の支配を受けているからである。それ以外の動詞はすべて対格を支配する。与格支配であれ対格支配であれ、コピュラは3人称単数(中性)形であ

る。つまり、この構文は無人称文であり、それによって一般性が表現されている。

1.2. 文構造

可能を表わす *být* + 動詞不定形構文の中には、人称文も見られる。これは、知覚の対象が対格目的語ではなく主格形をとり、この主格形を形式上の主語としてコピュラを一致させる形式を指す⁴。ハヴラーネクとイエドリチカによる文法書には、無人称文と対比させて以下の例が提示されている (Havránek a Jedlička 1981: 343)。

(10) a. *Je vidět Sněžka.*

「スニェシュカ山が見える。」(無人称文 : *Je vidět Sněžku.*)

b. *Jsou vidět hory.*

「山々が見える。」(無人称文 : *Je vidět hory.*)

c. *Byla slyšet hudba.*

「音楽が聞こえた。」(無人称文 : *Bylo slyšet hudbu.*)

20世紀初頭から文学作品に目立つようになったとはいえ、この形式は誤用であり非標準語的と見なされていた (Gebauer 1904: 389)。そのため、20世紀半ばの段階では学術誌で報告され考察の対象となつてはいるが (Porák 1962)、標準チェコ語のシntaxス (Šmilauer 1947) や標準チェコ語文法 (Trávníček 1951) には取り上げられていない。しかし、次第に新聞や雑誌に出現するようになり (Porák 1967: 83–85)、今では標準語の会話体と位置づけられている (PM 1995: 409)。語彙によっても、ばらつきが見られる。「においが感じられる」という意味の *cítit* が人称文に出現しはじめたのは、他の動詞よりも比較的新しい (Porák 1967: 84–85)。

(11) a. *Z jeho dechu byla cítit drahá pálenka.*

「彼の息は高い蒸留酒のにおいがした。」

b. *Proti sobě postavil malou kovovou misku, která byla cítit benzinem.*

「彼は自分の前にガソリンくさい金属製の小さなボウルを置いた。」

(以上 AG 2003: 683)

人称文の形式は文体的な色合いのない、ニュートラルなタイプに近づきつつあるとはいえ、いまだに口語的と受け取られている (AG 2013: 683)。

以上、チェコ語の *být* + 動詞不定形構文の特徴を概観した。第1章の終わりに、本稿冒頭の例文をもう1度検証する。

(1) **Bylo vidět** celou Prahu.

「プラハ全体が見えた。」

(2) Hluk z ulice **je slyšet** od rána.

「通りの騒音が朝から聞こえている。」

(3) Všude **byl cítit** kouř.

「どこもかしこも煙の臭いがした。」

(4) Na autě **bylo** těch absolvovaných 1000 km **znát**.

「車にはその走破した 1000 キロが刻まれていた (わかった)。」

(5) S tím účesem tě **bude** vždy zdálky **poznat**.

「そんな髪形をしていればいつだって遠くからでも君とわかるだろうね。」

(6) Přednášejícímu **nebylo** vůbec **rozumět**.

「講演者のいうことはぜんぜんわからなかった。」

意味的には、もはや古風とされる必要性・必然性を表わす文は一切扱われていない。したがって、動詞不定形の動作主体が与格形で表わされている例はない。さらに、文構造という観点からみると、(2) は文頭の **hluk** が主格と対格が同形であり、コンピュータは現在形であることから、無人称文、人称文のどちらの可能性もありうる。それに対して、(3) はコンピュータの L 分詞が **kouř** に一致して男性単数形の **byl** となっていることから、こちらは人称文であることが明白である。残りの 4 つの例文は、主格形と異なる対格形によって、あるいはコンピュータ **být** の L 分詞中性単数形によって、無人称文であることがわかる。つまり、スタンコウスカの『チェコ語文法』(Stankovska 2009) では文構造や文体に言及することなく、無人称文の形式と人称文の形式の両方が提示されているのである⁵。

2. スロヴェニア語の **biti** + 動詞不定形

現代スロヴェニア語における **biti** + 動詞不定形は周縁的な現象と見なされている。はじめに述べたように、可能という意味では再帰受動態構文が好まれるため (Stankovska 2009: 213)、この構文はチェコ語ほど頻繁に出現しないからである。標準語の規範の枠内で観察される構文であるとはいえ、それほど注目されることがない。したがって、英語で書かれたスロヴェニア語の文法書 (Herrity 2000) はこの構文に一切言及していない。初級学習者向けの文法書 (Lečič 2012) や外国人向けのスロヴェニア語教材でも扱われることはない。この構文は専門文献 (Jesenovec 1969, Pogorelec 2011) の中で扱われるか、スロヴェニア語の詳解文法のレベル (SS 1964, Toporišič 2000) でようやく取り上げられる。言及はあるものの、ポイントを落として注記という形式をとる文献もある (Piper 2009: 340)。

本章では、チェコ語と同様に意味と文構造の2つの面に分けて、スロヴェニア語における当該構文の特徴を先行研究から探る。

2.1. 意味

スロヴェニア語におけるこの構文は、チェコ語と同じく、動作の必要性あるいは可能を表わす (SS 1964: 258, Toporišič 2000: 402)。

2.1.1. 必要性

必要性を表わす例文を以下に示す。

(12) a. Iti mi je domov.

「私は家へ帰らなくてはならない。」

(Toporišič 2000: 402)

b. Lačnemu je stati v mlak'.

「飢えた男は水たまりの中に立ってなくてはならない。」

c. Na poti ga ulovi mrak, da mu je bilo prenočiti v gozdu.

「途中、暗くなったので、彼は森の中で夜を明かさなくてはならなかった。」

d. Mi daleč je priti nocoj.

「私は今夜遠出をしなくてはならない。」

e. Pretrpeti nam je.

「私たちは耐えなくてはならない。」

(b.–e. Jesenovec 1969: 36)

いずれの例文にも、不定形で表わされる動詞の動作主が与格形で出現している。二重線で示した部分である。この動作主を示す与格は代名詞が多い (Pogorelec 2011: 433)。上掲の例文も、(12b) の *Lačnemu* を除いてすべて人称代名詞の与格形である。必要性を意味するこの文構造は、ラテン語の受動分詞を用いた非人称構文と対応するとの指摘がなされている (Jesenovec 1969: 35, Pogorelec 2011: 433)。

19世紀半ばになると、「コピュラ+動詞不定形+動作主与格」という文構造の叙法的用法⁶は稀になる (Pogorelec 2011: 437)。確かに、イエセノヴェツツがその論文の中で挙げた上掲の例文は、(12b) がヴォドニク (1758–1819)、(12c) がエリャヴェツツ (1834–1887)、(12d) がアシュケルツ (1856–1912) の作品から、そして(12e)はプレテルシュニクのスロヴェニア語・ドイツ語辞典の第1巻 (1894) からの引用である。このことから、20世紀に入ってから日常的に用いられていないことがうかがえる。現代スロヴェニア語における必要性を表わす *biti* + 動詞不定形構文はチェコ語と同様に古風と受け取られており、結果として出現頻度が低いと考えられる。

2.1.2. 可能

可能を表わす代表的な例を先行研究と辞書から以下に挙げる。

(13) a. (= (1) b.) **Bilo je videti celo Prago.**

「プラハ全体が見えた。」 (再掲)

b. **Zvon je bilo slišati na gradu.**

「鐘の音が城で聞こえていた。」 (Piper 2009: 340)

c. **Na trgu je videti različno blago.**

「市場ではさまざまな商品が見られる。」 (SSKJ 2)

動詞不定形 *videti* の例は上掲の例文 (13c) のように辞書にも載っていることから、周辺の構文とはいえ、現代スロヴェニア語と接する際に完全に無視できるわけではなさそうである。

1.1.2. で述べたように、チェコ語における可能を表わす当該構文に現れる動詞不定形は、知覚動詞に限られる。しかし、スロヴェニア語ではそうでない例が報告されている。以下に示す文では、*biti* 「ある・いる」と *prebresti* 「渡る」という知覚を表わさない動詞の不定形がコピュラ *biti* と共起している。

(14) a. **Mati, mati, mamica, ni mi biti več doma.**

「かあさん、かあさん、おかあさん、私はもう家にいられない。」
(Jesenovec 1969: 36, Toporišič 2000: 402)

b. **Je struga globoka, prebresti jo ni.**

「川床が深くて渡りきれない。」 (Jesenovec 1969: 36)

例文 (14a) にはもう 1 つ、チェコ語と異なる点が見られる。1.1.2. で、現代チェコ語は与格によって動作主を表わせるのは必要性・必然性のときだけで、可能のときには与格動作主は出現しないと述べた。ところが、スロヴェニア語のこの例文には、人称代名詞 1 人称単数与格形 *mi* が出現し、動詞不定形 *biti* の動作主を表わしている。この例文が提示されたイェセノヴェツの論文にもトポリシチの文法書にも文体に関する記述はない。しかし、これは Sirota Jerica (『親のない子イェリツァ』) という 1200 年以降に成立した民衆バラードからの引用である。加えて、例文 (14b) も民謡からの引用である。

(14a) および (14b) の 2 つの例文を見る限りでは、スロヴェニア語の可能を意味する *biti* + 動詞不定形構文は、チェコ語と異なり知覚以外を意味する動詞も不定形として用いられる可能性があり、さらに与格によって動作主を表わせるようである。ただし、

前項でも述べたように「コンピュータ+動詞不定形+動作主与格」という文構造の叙法的用法は19世紀半ば以降は稀になる (Pogorelec 2011: 437) ことから、このような文は古めかしく、特定の文体で用いられることが推測される。

2.2. 文構造

先行研究からは、チェコ語のような人称文、すなわち不定形で表わされる動詞の目的語に相当する語が主格主語となる文構造に関する記述は見つけられなかった。

しかし、グリーンバーグは特殊な文構造の1つとして、「biti + videti + 形容詞」が look like, seem 「のようだ」という意味になることを紹介している (Greenberg 2008: 111)。

(15) a. Tujec je odpil požirek vina in prav **miren je bil videti**.

「見知らぬ人はワインを一口飲むとすっかり落ち着いたようだった。」

b. Stvari še daleč niso tako **enostavne**, kot **so videti** na prvi pogled.

「ことは初めに見えるほど簡単ではない。」

上掲の (15a) と (15b) の例文は、Tujec je bil miren. 「見知らぬ人は落ち着いた」(Stvari) so enostavne. 「(ことは) 簡単だ」の間に動詞不定形 videti が入り込むことによって、「落ち着いたようだった」「簡単そうだ」を意味している。すなわち、コンピュータ biti の人称形とともに述語を形成する語が存在しなければ成立しない。したがって、1.2. で取り上げたチェコ語の人称文 (10a) – (10c) とは別の構造の人称文である。このような biti+videti は英語の light verbs に対応する「弱化した意味をもつ動詞」(glagoli z oslabljenim pomenom) のうちの1つとして取り上げられることがある。

(16) Pot je **videti** dobra.

「道はよさそうだ。」

(SSKJ2, Godec Soršak 2013: 515)

コンピュータの biti と同様に「つなぎ」として機能するが、そればかりではなく、何らかの意味合いが加わるという (Godec Soršak 2013: 515)。何らかとは、この場合は外見からの推量である。

さらに、SSKJ2 には見出し語 slišati にも、この動詞の不定形が弱化した意味をもつ動詞として機能し、人称文の間に入り込む例が挙げられている。

(17) Kar je rekel, **je bilo slišati** prijazno.

「彼の述べたことは、どうやら親切なことだったようだ。」

(SSKJ2)

以上、現代スロヴェニア語には、チェコ語に対応するような、不定形で表わされる動詞の対象が主格主語となって現れる人称文が存在するかどうかは、先行研究から確認できなかった。そのかわり、形容詞を伴う別の人称文が *slišati* と *videti* にあることが報告され、辞書にも載っている。これらの人称文における不定形 *slišati* および *videti* はコピュラ *biti* の人称形と共に「弱化した意味の動詞」として機能する。

しかし、チェコ語と比べるとスロヴェニア語の当該構文に関する先行研究は大変少なく、例文の数に限りがある。そのため、この構文の特徴、とりわけ文体に関して確言することはできない。次章では実際の使用はどのようになっているのか、「コピュラ *biti* + 動詞不定形構文」をスロヴェニア語コーパスから抽出して考察する。

3. コーパスを用いた当該構文の分析

はじめに使用したコーパスの説明をし、その後、検出結果に移る。

3.1. 使用コーパス

本稿で用いたスロヴェニア語コーパスは *Nova beseda* である。スロヴェニア科学アカデミーのフラン・ラモウシュ名称スロヴェニア語研究所が中心となってまとめたコーパスで、4158 テキストからおよそ 1 億 6200 万語が収録されている。

スロヴェニア語のコーパスにはもう 1 つ *Gigafida* も知られている。こちらのコーパスはヨーロッパ社会基金とスロヴェニア共和国教育科学スポーツ省が資金提供をしているプロジェクト「スロヴェニア語における理解」(*Sporazumevanje v slovenskem jeziku*) の一環として立ち上げられた。1991 年から 2011 年に出版された書籍、新聞、雑誌から収集されたデータを基にし、12 億語を有す大規模な現代スロヴェニア語コーパスである。

しかし、*Nova beseda* は現代語に限らず 19 世紀の文学作品からもデータを収集しており、収録語彙数は *Gigafida* より少ないとはいえ、基とするテキストの時間的な幅は広い。そのため、第 1 章で述べたような、チェコの民族復興期における特殊な事情がスロヴェニア語にも認められるのかどうかを調べるには適していると判断し、*Nova beseda* を採用した。

このコーパスは大きく分けて 8 つの分野から構成されている。

A 文学 —— 主として詩と小説

B 「半」文学 —— エッセイや論説

C 専門文献

D 新聞 —— 1998 年～ 2010 年に発行された *Delo* 紙

F 通俗的なテキスト — 辞書・百科事典とハンドブック

G 口頭表現 ——1996年以降の国会議事録とテレビ番組の字幕サービス
 Odprti kop
 P 雑誌
 S 法律

全体として見れば、標準語コーパスという性格が強い。最近の更新は2015年3月30日になされた。このコーパスを用いて、チェコ語の知覚動詞 *cítit* 「感じる、においを感じる」、*poznat* 「知る」、*rozumět* 「わかる」、*slyšet* 「聞こえる」、*vidět* 「見える」、*znát* 「知っている」に対応するスロヴェニア語 *čutiti* 「感じる」、*vohati* 「においを感じる」、*spoznati* 「知る」、*razumeti* 「わかる」、*slišati* 「聞こえる」、*videti* 「見える」、*poznati* 「知っている」に加えて、例文(5)にある *prepoznati* 「見分ける、気づく」の不定形が含まれる文を検索した。

3.2. 検索結果

以上8つの動詞不定形を検索にかけて抽出した上で、コンピュータ *biti* の人称形と共に起する構文を選り分けた⁷。以下、検出された数の少ない順に具体例を紹介する。

もっとも少なかったのは *vohati* で、4例が認められた。

(18) [...] res je, že kar v zraku **je vohati** poletje.

「[...] ほんとうに、もうあたりは夏のにおいがします。」

(TVS-Odprti kop-Umko: nedelja, 1.junij 2008)

あとの3例のうち、1例は上掲の例文(18)と同じ2008年6月1日のテレビ番組(G口頭表現)より、残る2例は1998年の *Delo* 紙からの記事である。

次に少なかったのが *spoznati* の22例である。A文学作品からの例が多く、22例中10例が文学作品に認められた。

(19) In tako se je zgodilo, da lesenega moža **ni bilo** zdaj nikakor **spoznati**.

「そうして、木の男は今やまったく知られることがなくなってしまう。」

(Fran Levstik. Sveti doktor Bežanec v Tožbanji vasi.)

次いで *poznati* の用いられる例が34例検出された。A文学作品とD新聞で合わせて7割以上(25例)を占める。

(20) **Poznati je**, da je pripravljena na vse, na vsak slučaj, na vsako presenečenje.

「彼女はすべてに対して、どんな場合にも、どんな意外なことに対しても覚悟していることがわかる。」

(Alojz Kraigher. Peter Drozeg.)

さらに *prepoznati* は、100 例に *biti* の人称形との共起が認められた。そのほとんど、85 例が D 新聞に出現している。

(21) **Ni takoj *prepoznati*, iz katere dežele prihaja, in včasih tudi ne, ali je moški ali ženska.**

「どの国から来たのか、すぐには判別できない。また、男性なのか女性なのかも時に不明である。」 (Delo 24. 3. 2001.)

上記 4 つの動詞と比べると格段に多く、1245 例検出されたのが *razumeti* であった。そのうち 1000 例以上が D 新聞に出現し、しかも接続詞 *kot* に導かれる例が目立つ。

(22) **Kot *je bilo razumeti*, domačini podpirajo te smeje načrte, ki bodo v prihodnih letih prinesli novih 60 delovnih mest.**

「周知のごとく、地元の人たちは、将来新たに 60 もの就業場所をもたらすであろうこの果敢な計画を支持しているのである。」 (Delo 26. 4. 2006.)

4 桁の出現数は *čutiti* にも見られた。この動詞の不定形は 3936 例でコピュラ *biti* と共起していた。そのうち、ほぼ 8 割にあたる 3155 例が D 新聞に見られる。

(23) **V soparnem zraku *je bilo čutiti* pričakovanje.**

「蒸し暑い空気の中に期待が感じられた。」 (Delo 4.7. 2000.)

10000 例以上見られた動詞は *slišati* と *videti* である。まず、*slišati* の用いられる例は 15304 例検出された。*razumeti* と同じく D 新聞に多いが、それ以外では P 雑誌のうち Delo 紙の付録雑誌の出現率が高い。

(24) **V filmu *je slišati* tudi dve pesmi, ki izvirata iz samih začetkov veвериčje slave v petdesetih: The Witch Doctor in The Chipmunk song.**

「映画の中では 2 曲の歌も聞こえる。これらの歌は 50 年代にリスたちが有名になったそもそもの最初から歌われていた曲だ。つまり、ウィッチ・ドクターとチップマンク・ソングである。」 (Vikend—Priloga Dela 2008)

もっとも多かったのが *videti* で、29279 例見られた。以下は B エッセイ・論説からの例である。

(25) Povsod **je bilo videti** mrzlične priprave.「いたるところでおおわらわの準備が見られた。」

(Tomo Križar: O iskanju ljubezni.)

以上の検索結果を 3.1. で紹介した 8 つの分野ごとに分けて以下に示す。各分野の点線の下が、検索して得られた動詞不定形の数、上の太字が選り分けられた biti の人称形と共起する動詞不定形の数である。

〈表 1 知覚動詞不定形全体の検出数に対する biti の人称形と共起する数〉

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
A	0	10	15	1	2	80	518	2283
	12	244	152	45	528	195	1089	3441
B	0	2	1	1	3	43	31	353
	1	78	43	19	280	74	75	551
C	0	1	0	0	13	41	34	332
	0	100	80	67	335	61	75	531
D	2	6	10	85	1044	3155	12333	19561
	33	1864	1534	1589	10087	3833	16556	28418
F	0	0	0	0	0	1	2	30
	0	0	0	7	0	1	3	34
G	2	1	0	2	135	175	799	628
	6	194	313	104	2568	268	1995	2014
P	0	2	8	11	48	441	1585	6092
	3	533	597	557	1871	672	2361	8348
S	0	0	0	0	0	0	0	0
	0	0	3	1	0	0	0	0
計	4	22	34	100	1245	3936	15302	29279
	55	3013	2722	2389	15669	5104	22154	43337

① : vohati, ② : spoznati, ③ : poznati, ④ : prepoznati, ⑤ : razumeti, ⑥ : čutiti, ⑦ : slišati,
⑧ : videti

本項で提示した例文 (18) – (25) はすべての動詞に共通する構造、すなわち無人称文に限定した⁸。しかし、3.2.3. および 3.2.4. で後述するように、一部の動詞には人称文も認められる。表 1 で示した点線の上の太字の数字は、人称文も含めてコンピュータ biti と動詞不定形が共起する数を表わす。

3.2.1. 意味

2.1.1. で、必要性は古風であることが確認できていたので、A 文学のみを精査した。このジャンルだけが必要性を表わしうる時代のテキストを扱っているからである。筆者が調べた限りでは、この意味の文が 1 例見つかった。

(26) »Pa ne, da je naš...?« je vprašala Kocmurjeva in se bala, kaj ji **bo** zopet **slišati**.

「『え、まさか、うちの……』とコツムル夫人は尋ね、また何を聞くはめになるやらと恐れた。」 (Fran Milčinski. Ptički brez gnezda.)

ミルチンスキ (1867–1932) 著 Ptički brez gnezda (『巣のない小鳥たち』) は 1917 年に発表された小説で、第 1 次世界大戦がはじまる前、スロヴェニアがオーストリアの一部であったころを舞台としている。この小説に必要性を表わす上掲の例文が見られた。この例文以外の biti + 知覚動詞不定形は可能か、あるいは videti を中心に弱化した「~のようだ」を表わす。

しかし、既述のように必要性を表わすときの動詞不定形は、知覚動詞とは限らない。2.1.1. では先行研究から得られた例文 (12a) – (12e) によって、動詞不定形 iti, stati, prenočiti, priti, pretrpeti が必要性を表わすこの構文に出現していることが確認できた。他の動詞不定形も必要性を表わす可能性は充分考えられるものの、どの動詞にすべきか決めかねたので、これら 5 つの動詞に限り不定形をコーパスで検索し、コンピュータ biti の人称形と共起する例を検出して先行研究の記述と照合することにした。すると以下の結果が得られた。知覚動詞の検出結果と同じく得られた例の少ない順で提示する。

動詞不定形 stati 「立っている」がこの構文に用いられている例はない。1 例のみに prenočiti 「夜を明かす」の、そして 2 例に pretrpeti 「耐える」の出現が見られた。

(27) a. Če nama **bo** prenočiti nocoj v gozdu, [...]

「もし私たちが今夜森で夜を明かさなければならぬのなら [...]

(Josip Stritar. Godpod Mirodolski.)

b. Nič se neboj tega, kar ti je pretrpeti.

「汝受けんとする苦難を懼るな。」

(Drago Jančar. Katarina, pav in jezuit.)

例文 (27a) はストリタル (1836–1923) が 1876 年に発表した小説に現れている。(27b) の pretrpeti の例は、現役の作家であるヤンチャル (1948–) の小説からではあるが、この文は新約聖書「ヨハネの黙示録」第 2 章 10 節からの引用である。

2 桁の出現が見られたのが、priti 「到着する」の 12 例、iti 「行く」の 24 例であった。

前者は半数の 6 例が、そして後者は 7 割ちかくの 16 例がゾレツの諸作品に出現した。

(28) a. Pred nočjo jim je bilo priti le do Višnje gore.

「夜になる前に彼らはせめてヴィーシュニャ山についていなくてはならなかった。」
(Ivan Zorec. Izgnani menihi.)

b. Le jutri in pojutrišnjem ne bi utegnil, po nekih opravkih mi je iti v Ljubljano.

「明日、明後日ではもう間に合わないだろう、いくつか用事をすませたらリュブリャーナへ行かなくては。」
(Ivan Zorec. Stiški tlačan.)

例文 (28a) と (28b) は、いずれもゾレツ (1880–1952) によるスティチナ修道院を舞台とした 4 部作の歴史小説に集中して出現している。

以上、知覚動詞よりも出現数の多いものがあるとはいえ、必要性を表わす当該構文は、聖書からの引用であったり、20 世紀前半に活動した作家の歴史小説に見られたりする。したがって、19 世紀半ばになると必要性を表わす用法は稀になるという 2.1.1. で紹介した先行研究の記述と符合する。

次項からは再び不定形は知覚動詞に絞って考察する。

3. 2. 2. 与格による動作主

与格形と biti + 動詞不定形構文が共起する例は 1000 例あまり検出された。しかし、そのうちのほとんど (974 例) が ni videti konca 「終わりが見えない」という構造に出現する。この語結合は D 新聞に集中していて、850 例がここに見られる。

(29) a. Konfliktom ni videti konca.

「紛争に終わりが見えない。」 (Delo 31.12.1998.)

b. Sporom ni videti konca.

「論争に終わりが見えない。」 (Delo 5.8.2008)

見出しに用いられているため、上掲の例のように短い文が多い。これら 2 つの例文に現れる複数与格形 konfliktom 「紛争」および sporom 「論争」は videti 「見る」の動作主とは解釈できない。おそらく関与の与格であろう。

動詞不定形が videti の文には、さらに接続詞 da に導かれる従属文をとまなうときに共起する与格形が 83 例見られた。

(30) a. **Videti ji je**, da je vajena gospodovati in zapovedovati brez ugovora.

「どうやら彼女は反対されずに管理し支配することに慣れているようだ。」

(Josip Stritar. Gospod Mirodolski.)

b. Povedati hočem, da je **Hribu videti**, da živi.

「いいたいことは、フリブは生きているようなのである。」

(Delo 2.2.2010.)

c. In tudi **videti jim je bilo**, da jim je vroče in da so prepoteni.

「それに、彼らは暑くて汗をかきすぎているようでもあった。」

(Revija Mladina 2007)

例文 (30a) – (30c) に現れる与格も、videti 「見る」という動作をする人とは解釈できない。与格形の「彼女」、「フリブ」、「彼ら」の見た目の様子が表わされている。したがって、動作主とはみなせない。これもおそらく関与の機能があると思われる。

その他 videti 以外の動詞にも、不定形で表わされる動詞の動作主とは解釈できない与格の例がわずかながら認められた。

(31) a. **Poznati jima je** na prvi pogled, da sta dobro imovita gospodarja.

「彼ら 2 人は、一目でとても裕福な地主であることが見て取れる。」

(Janko Kersnik. Rejenčeva osveta.)

b. Rokopis je bil tipkan, toda **poznati mu je bilo**, da je šel od rok do rok številnih ljudi ali pa da lasnik imel nobenega normalnega predala, temveč da ga je nosil večidel po žepih.

「原稿はタイプ打ちされていた。ただ、それはたくさんの人の手から手へ渡ったか、持ち主はまともな抽斗を1つも持っておらずたいがいポケットに入れて持ち歩いていたとわかった。」

(Josip Vidmar. Obrazi.)

これらの例文のうち、(31a) は彼ら 2 人が裕福な地主だということが誰から見てもわかるという意味であり、poznati 「わかる」の動作主が「彼ら 2 人」とは考えられない。同様に、(31b) は原稿の状態から、これまでどのような経路をたどってきたのか「わかる」と述べており、与格の mu は文頭 rokopis 「原稿」を指している。したがって、これも動作主を示していない。

このような文を除くと、与格が動詞不定形の動作主を明らかに表わしている例は合計 13 例あった。そのうち čutiti 「感じる」と共起する例は 1 例見られた。

- (32) [...] radi pa bi preverili, ali je naše telo res čilo, kot **nam je čütiti**, [...]
 「[...] 私たちの身体は、感じられるようにほんとうに健康なのか確かめたくなり [...]」
 (Slovenske novice—ČGP Delo, leto 2008.)

与格動作主が *razumeti* 「理解する」と共起する例は2例あった。

- (33) [...] (dolgoletno počasnost **je Ježu kot varstveniku** narave **razumeti** kakor namerno zavlačevanje),
 「[...] (長年にわたる停滞は、自然保護官としてのイエジュには、意図的な遅延と理解できた)」
 (Delo 11.7. 2001.)

与格動作主が *slišati* 「聞こえる」と共起する例は4例である。

- (34) a. Da **mu je slišati** zvon svetega Jurija – kaj mi vse drugo!
 「彼には聖ユーリーの鐘が聞こえている —— 私にはまったく別のものが！」
 (Ivan Cankar. Urlavb.)
- b. Bratoma ni nič povedal, kakovih **mu je bilo slišati** pri Neži, [...]
 「彼は、ネジャのところで耳にしたような話は2人の修道士たちにいっさい話さなかった [...]」
 (Ivan Zorec. Izgnani menihi.)

動詞不定形の出現数および *biti* の人称変化形と共起する例がもっとも多い *videti* 「見える」は6例に与格動作主が現れていた。

- (35) a. »Prav nič **tj ni videti**.«
 「お前はまったく何にも見えていない。」 (Marjan Rožanc. Pravljica.)
- b. Bi lahko rekli, da se tistemu, ki živi z umirajočim in je vsak dan priča njegovemu fizičnemu propadanju in vsem tegobam, ki jih umiranje prinese s seboj, vse to zdi normalno in sploh ne tako grozno, kot **je videti nekому** od zunaj?
 「死にゆく人と暮らして毎日その人の肉体的な衰えと死に至る苦難を目にしている者にとって、そういうことすべては当然で、外からの誰かの目に映るほど 恐ろしいことではない、といえるのだろうか。」 (Ona—priloga Dela, 2008.)
- c. Če bi kdaj naredili korak stran, bi spoznali, da zmotljivost ni tako usodna, kot **jim je videti**.
 「わきに寄ってみるならば、誤りやすさは彼らの目にうつるほどには致命的でないことがわかるだろう。」 (Slovenske novice—ČGP Delo, 2008)

分野別に見ると、A 文学 3 例、B エッセイ・論説 2 例、D 新聞 2 例、G 口頭表現 1 例、P 雑誌 5 例という内訳になる。2.1. では、先行研究における与格形によって動作主が表わされる例文が、民衆バラードと民謡からの引用だったことから、特定の文体およびジャンルに出現するのではないかと推測した。しかし、コーパスを分析すると、そうとは限らずフィクション、ノンフィクションの区別なく出現するという結果が導き出された。また、新聞や雑誌に出現するこれらの構文はとくに古めかしさを狙ったとは思えない。ただし、その数はとても少ない。

3.2.3. 人称文 [1]

2.2. で述べたように、不定形で表わされる動詞の目的語が主格主語となる人称文に言及した先行研究は見つけられなかった。しかし、コーパスを用いて調べた結果、動詞不定形 *čutiti*, *slišati*, *videti* にはこの構文がわずかに認められた。このタイプの人称文としか解釈しようのない文を以下に示す。

動詞不定形 *čutiti* 「感じる」の含まれるこのタイプの人称文は、D 新聞に 2 例見られた。

(36) a. Janzenistični vpliv **je bil** na Slovenskem **čutiti** še skoraj vso 1. polovico 19. stoletja, ko je pod ljubljanskim škofom Wolfom polagoma prodiral nov duh tudi med cerkvene pisatelje.

「ヤンセン主義の影響はスロヴェニアにおいて 19 世紀の前半の間ほぼずっと感じられた。リュブリャーナ司教ウォルフのもと教会の作家たちの間にも徐々に新しい精神が浸透しつつあった頃である。」

(Delo 3. 11.1999.)

b. Tedaj so bile igralke vrhunsko motivirane, **čutiti je bil** močan ekipni duh[...]

「そのとき、選手たちの意欲は最高潮に達していて、一致団結の精神が強く感じられ[...]

(Delo 16.7. 2009.)

動詞不定形 *slišati* 「聞こえる」の対象に当たる語が主格主語として現れる人称文は 32 例あった。そのうち、もっとも多いのが D 新聞からの 21 例である。

(37) a. Kajti iz prsi se ji je izvil globok vzdih, na ustih ji je zaigral nasmeh za milijon dolarjev, **slišati je bil** osvobajajoč krik: »Oh my God, I love it up here!« (Moj bog, tukaj gori mi je všeč!)

「彼女の胸から深い息がもれ、口元に 100 万ドルの笑みが浮かぶと、解き放つかのような叫びが聞こえた。『まあ、ここ、上は気に入ったわ!』」 (Delo 31.3.2001.)

b. **So bili slišati** novi trendi v turističnem povprašanju?

「旅行に関する要望の中に新しい流行は聞こえただろうか」 (Delo 18.12.2002.)

次に多かったのが A 文学で、6 例あった。そのうち 5 例がユルチチの諸作品に集中している。

(38) a. Potem dolgo zopet na ušesa vleče, a le ravs od grada in iz vasi **je bil slišati**, vse drugo je bilo tiho.

「その後長いことまた耳を澄ませていたが、城と村から乱闘の音が聞こえてくるだけで、それ以外は静かだった。」 (Josip Jurčič. Domen.)

b. Zdaj **je bil** krik in ropot **slišati**.

「こんどは叫び声とがたがたいう音が聞こえた。」 (Josip Jurčič. Hči mestnega sodnika.)

その他は、B エッセイ・論説、G 口頭表現、P 雑誌に 1 例ずつである。以下は B のエッセイ・論説に現れた例である。

(39) V daljavi **so** že tretji dan **slišati** topovi.

「遠くで大砲の音が聞こえるようになってもう 3 日目だ。」 (Janko Hancin. Vsi ti mladi fantje.)

動詞不定形 videti 「見える」の対象が主格主語として示される人称文は 19 例認められた。分野別の内訳は A 文学 14 例、D 新聞 5 例である。文学作品のうち目立つのが、ケルスニクの諸作品の 5 例とユルチチの諸作品の 4 例であった。

(40) a. Gledala ga je koketno, ljubeznivo in usta so bila malo raztegnjena na smeh, da **je bila videti** dvojna vrsta njenih svetlobelih zob.

「色っぽく優しく彼を見た。そしてその口は笑みに少し開いたので、2 列の輝く歯が見えた。」 (Janko Kersnik. Ciklamen.)

b. Nekaj trenutkov potem **je bil** namreč pred oknom **videti** Božidar Tirtelj.

「その後ほどなくして、窓の前にまさにボジダル・ティルテルが見えた。」 (Josip Jurčič. Golida in druge povesti.)

ケルスニク (1852–1897)、ユルチチ (1844–1881) とともに 19 世紀末に活動した作家である。新聞にもこの人称文は見られることから、廃れたと一概に断ずることはできな

いが、このタイプの人称文が特定の時代の特定の作家に集中して見られることは確かである。

以上、先行研究には言及のなかった、動詞不定形の対象が主格主語として現れる人称文が、*čutiti*「感じる」、*slišati*「聞こえる」、*videti*「見える」の3つの動詞に限りごく少数ながら存在することが確認できた。興味深いことに、*slišati*と*videti*の用いられるこのタイプの人称文は、19世紀を中心とする作家および作品に偏って出現する。

3.2.4. 人称文 [2]

弱化した意味の動詞として動詞不定形が「述語 *biti* + 形容詞」と共起する構造をとる例は、先行研究から確認できていた *videti*「見える」と *slišati*「聞こえる」、すなわち例文 (15a) および (15b) 以外に *čutiti*「感じる」にも見られた。つまり、前項で取り上げた動詞不定形の対象が主格主語として現れる形式も含めて、人称文はいずれも *čutiti*, *slišati*, *videti* の3つの動詞に出現する。

ただし、*čutiti*「感じる」が弱化した意味の動詞として用いられる例は1例のみなので、特殊な例と考えてよいであろう。

(41) Na licih so bile globoke brazde, ličnice **so bile čutiti ostre**, nos sploščeni.

「頬には深いしわがあり、頬骨は鋭く鼻は押しつぶされているように感じられた。」

(George Orwell. 1984.)

それに対して *slišati*「聞こえる」は、432例で *biti* + 形容詞と共起していた。D新聞(268例)とP雑誌(65例)で8割近くを占める。

(42) a. Toda francoski predsednik **je slišati odločen**.

「しかし、フランスの大統領は決意を固めているように聞こえる。」

(Delo 12.2. 2009)

b. Za skoraj sedem let in že drugič mrtvega ter v tretje vstalega od mrtvih, [...], **je bil slišati zelo zdrav**.

「2度死んで3度目に起き上がったときからほぼ7年を経て [...], 彼は大変元気そうだった。」

(Polet—priloga Dela. 2007)

新聞と雑誌には、形容詞ではなく近似を意味する接続詞 *kot* + 名詞で「～のような」を表わす例も見られた。

(43) a. Scenariji družbene prenovе **so slišati kot** nekakšna socialistična utopija.

「社会再生のシナリオは社会主義的なユートピアであるかのように聞こえる。」
(Delo 25.3. 2008)

b. Resnica o vietnamski vojni **bi bila slišati kot** resnica o iraški vojni.

「ヴェトナム戦争の真実、イラク戦争の真実であるかのように聞こえるであろう。」
(Revija Mladina 2004)

A 文学における「弱化した意味」の *slišati* は、52 例すべてが翻訳作品に見られた。そのうち 34 例がアイルランドの小説家ビンチーの『タラ通りの大きな家』に集中している。

(44) Híraly **je bila slišati** nadvse prepričana.

「ヒラリーは固く信じているようだった。」 (Maevе Binchy. Hiša v Tari.)

あるセリフの直後、あるいは会話の中で見られる例ばかりである。作家の個性のみならず、翻訳者の個性も考慮すべきかもしれない。

そして、*videti* 「見える」が弱化した意味として用いられる例は大変多く、14218 例にも及ぶ。A 文学の分野では、*slišati* で挙げたビンチー著『タラ通りの大きな家』に加え、ドラブル著『黄金の王国』にも多く見られる。

(45) a. Hillary **je bila videti** utrujena in nezadovoljna.

「ヒラリーは疲れて不満なようだった。」 (Maevе Binchy. Hiša v Tari.)

b. Toda resnično **je bil** Karel zadnje čase **videti bolan in utrujen**.

「ただ、最近のカレルは本当に病んで疲れているように見えた。」
(Margaret Drabble. Zlati svetovi.)

このタイプの人称文における *videti* は、*slišati* と異なりスロヴェニア人作家の作品にも出現する点が特徴的である。

(46) a. Bolna si. Prav **slaba si videti**.

「おまえは病気だ。本当に具合が悪そうだ。」 (Dago Jančar. Heretik.)

b. **Bil je videti** starejši in mlajši.

「彼はもっと年をとっているようにも、もっと若いようにもみえた。」
(Ciril Kosmač. Balada o trobenti in oblaku.)

しかし、ある種の偏りが認められる。ヤンチャルの諸作品に多く見られる一方で、ツァンカルの諸作品には少ない。

弱化した意味の *videti* を伴う人称文は、ジャンル別に見ると A 文学は 3 番目に多い。もっとも多いのは D 新聞で、次いで P 雑誌である。新聞と雑誌合わせてこのタイプの人称文の 9 割が集中している。

(47) a. V Prištini so redki mimoidoči **videti mirni in sproščeni**.

「プリシュティナではたまに通り過ぎる人が穏やかでリラックスして見える。」

(Delo. 22.2.1999)

b. [...] in da so povprečnemu uporabniku fotografije **videti fantastične**.

「[...] そして、平均的な使用者にとって写真はすばらしく見える。」

(Revija Monitor, leto 2004)

また、*slišati* と同じく、新聞と雑誌には近似を意味する接続詞 *kot* + 名詞と共起する例も見られる。

(48) a. »Tokrat **smo bili dejansko videti kot** del Evrope in na to smo lahko ponosni.«

「そのころ私たちは実際にヨーロッパの一部のように見え、そのことが誇らしくも思えるのだ。」

(Delo 28.2.2005)

b. Čeprav je bila stara že štirideset let, **je bila videti kot** mladenka.

「彼女はもう 40 歳であったにもかかわらず、若い娘のように見えた。」

(Revija Mladina, leto 2007)

新聞・雑誌と比べると数は少ないとはいえ、100 例以上見られたのが、B エッセイ・論説、C 専門文献、G 口頭表現である。各分野から 1 例ずつ挙げる。

(49) —poglejmo torej, **kakšen bi bil ta jezik videti**.

「——では、この言語がどんな感じなのか、見てみよう。」

(L.L.Zamenhof, Vinko Ošlak, Tim O Wüster, Mark Fetts.

Mednarodni jezik: realna ali nerealna utopija?)

(50) Pogledal sem skozi okno in vse **je bilo videti kot** običajno,[...]

「私は窓の向こうに目をやった。そしてすべてが普段どおりに見えた [...]」

(Emil Hrvatin (ur.) Teorije sodobnega plesa, Maska 2001.)

(51) Prihodnost **ni bila videti** nič manj žalostna.

「未来はまさに暗そうだった。」

(TVS-Odprti kot-Opus: Dmitriji Šostakovič; ponedeljek, 11. september 2006)

一番少なかったのが F の辞典・百科事典、ハンドブックだった。

(52) Približno petnajst centimetrov veliki plazilec **je videti kot** majhna pošast [...]

「ほぼ 15 センチの大きさの爬虫類は、小さな怪物に見えた [...]

(Več avtrov. Srečanje z živalmi. Moja prva enciklopedija. 2002.)

以下に *slišati* 「聞こえる」および *videti* 「見える」の人称文 [1] (動詞不定形の対象が主格主語として現れる人称文)、人称文 [2] (動詞不定形が弱化した意味として用いられる人称文)、無人称文の分野別内訳を表にして示す。確かに *čutiti* 「感じる」を含む人称文も [1]、[2] とも存在する。しかし、前者は 2 例、後者は 1 例のみだったので、表は *slišati* と *videti* に限定する。

〈表 2 *biti* の人称形と共起する動詞不定形 *slišati* の分野別内訳〉

	人称文 [1]	人称文 [2]	無人称文	計
A	6	52	460	518
B	1	4	26	31
C	0	2	32	34
D	21	268	12044	12333
F	0	0	2	2
G	1	42	756	799
P	1	65	1519	1585
計	30	433	14839	15302

〈表 3 *biti* の人称形と共起する動詞不定形 *videti* の分野別内訳〉

	人称文 [1]	人称文 [2]	無人称文	計
A	14	1101	1168	2283
B	0	120	233	353
C	0	182	150	332
D	5	9117	10439	19561
F	0	27	3	30
G	0	153	475	628
P	0	3520	2572	6092
計	19	14220	15040	29279

人称文 [1] は、slišati の出現率が 0.2% であり videti は 0.06% である。この数値によって、チェコ語では増えつつあるこの構文がスロヴェニア語においては特殊な例であることがはっきりする。文学の分野では、19 世紀の作家の方が 20 世紀および現在の作家よりも多用している。それに対して人称文 [2] は、slišati の出現率は 3% にとどまったが、videti は 48.6% に達し、分野によっては無人称文より多く見られる。辞書や文法書で言及されるのもうなずける。弱化した意味の biti + slišati/ videti は、作家や作品に偏りが見られる。しかし、現役の作家も含まれていることから、古風と断ずることはできない。

3.2.5. 知覚動詞以外の意味の動詞不定形

2.1.2. では、当該構文の不定形が知覚動詞に限らない例として、biti 「いる・ある」と prebresti 「渡る」の出現する例文 (14a) と (14b) を先行研究から引用した。しかし、これらの動詞不定形をコーパスで検索した結果、当該構文中には見られなかった。先行研究中の例は典型ではあるが、数的に多いという理由で取り上げられたとは考えにくい。

それ以外の動詞に関しては、体系的に調べることができなかつた。どれをコーパスで検索すべきか決めかねたからである。しかし、8 個の知覚動詞の不定形がコンピュータ biti と共起する例を調べる過程で、同時に他の動詞不定形も見つかった。以下に提示する。

もっとも多かったのが prebrati 「読む、読み通す」の 8 例である。

(53) a. V medijih je **prebrati** in slišati, da že pripravljajo novo referendumsko pobudo.

「メディアでは、新たに国民投票をしようではないかと準備していると読めますし、聞こえます。」

(Državni zbor RS 3. sklica—dobesedni zapisi sej: 40. izredna seja, zasedanje 10.2.2004)

b. Če se ne čuti krivega, zakaj bi hodil pred sodnike, **je slišati** in **prebrati** v hrvaških medijih.

「もし、有罪と感じられないのなら、どうして彼は裁判所へ通おうとするのだろうか、という意見がクロアチアのメディアで聞こえ、また読まれる。」

(Revija Mladina 2005)

次いで brati 「読む」が 5 例見られた。

- (54) Kajti v javnosti in tudi v časopisih **je** mnogokrat **brati** in slišati, da država oziroma davčna uprava ne bo oziroma ni pripravljena.

「ですから公に、また新聞でも、国家すなわち税務署は準備ができていないと何度も読まれていますし、聞かれるのです。」

(Državni zbor RS 2.sklica—dobesedni zapisi sej: 29. izredna seja, zasedanje 4.12.1998)

そして、**najti**「見つける」、**slutiti**「予測する、予感がする」、**vedeti**「知る」が2例ずつ **biti** の人称形と共起していた。

- (55) Pri tem je pridno zbiral za svojo zasebno zbirko sodobna slikarska imena, med katerimi **je najti** Tatlina, Warhola, Picabio, Maleviča, Brancusija pa spornega Bengtssona [...]

「こうしながら、自分の個人コレクションのために現代絵画の画家の名前を勤勉に集めたのである。そのなかには、タトリン、ウォーホル、ピカビア、マレーヴィチ、ブランクシ、それに議論の的となるベンクトソンが見つかる [...]」

(Delo. 22.4.2007)

- (56) **Slutiti je** iskriv duh in slišati, kako hitijo zgoščene besede.

「気の利いたセンスが想定され、また圧縮されたことばがどれほどの速さで流れてくるか聞こえる。」

(Delo. 27.1.2010)

以下の動詞は1例ずつ認められた。すなわち、**dobiti**「得る」、**doživeti**「経験する」、**okusiti**「味わう」、**opaziti**「認める、気づく」、**otipati**「触れる」、**prebirati**「読む、読み通す」、**priznati**「認める」、**upoštevati**「従う」、**zaznati**「感じる」。

意味的には知覚そのものともいえる、**okusiti**、**opaziti**、**otipati**、**vedeti**、**zaznati** もあれば、それに近い **slutiti**、**doživeti** などがこの構文に出現する。しかし、あくまでも8つの知覚動詞の不定形を検索する過程で見られた動詞なので、ここから何らかの結論を導き出すことはできない。

1例のみ、知覚から遠いと思われる意味の **dobiti** の例を以下に示しておく。

- (57) Zdaj jih ni nikjer niti videti niti **dobiti**.

「今やそれらはどこでも見ることができないし、得ることができない。」

(Delo in Dom—Priloga Dela, leto 2008)

分野別にみると、D 新聞 20 例、G 口頭表現 5 例、P 雑誌 3 例である。口頭表現の 5 例はすべてが国会の議事録である。これらの知覚以外の意味の動詞はすべて無人称文の中に見られた。

4. まとめ

スロヴェニア語の *biti* + 動詞不定形構文は、チェコ語の当該構文 *být* + 動詞不定形構文と対照させると、以下のような特徴が浮かび上がる。

この構文はスロヴェニア語学においては周辺的な扱いを受けている。理由は出現頻度が低く、現代ではそれほど用いられないとみなされているからである。しかし、コーパスで検索すると、*slišati* 「聞こえる」と *videti* 「見える」を含む例に限り、決して稀とは断言できないほどの数が検出される。特に、表 2 および表 3 で示したように、新聞における無人称文の形式をとる当該構文の出現数は多く、*Delo* 紙を読んでいると、*slišati* が含まれる構文とは平均して毎日 2 – 3 例、*videti* が含まれる構文とは 4 例ほど出会うことになる。

この無人称文が表わす意味は、チェコ語と同様に可能が中心であり、必要性という意味では、現在はほぼ用いられない。可能を表わす場合、チェコ語は与格の動作主が現れない。ところが、スロヴェニア語コーパスでは稀な例とはいえ、出現する。語彙面に注目すると、チェコ語の当該構文は不定形が知覚動詞に限られるのに対し、スロヴェニア語では、知覚以外の意味の動詞不定形もコピュラ *biti* の人称形と共起しうる。8 つの知覚動詞の不定形を検索する過程で、*dobiti* 「得る」、*upoštevati* 「従う」など、知覚を意味するとはいえない動詞の不定形が用いられる例が見いだされた。

以上、無人称文に関しては次のようにまとめられる。チェコ語におけるこの構文は「コピュラ *být* の人称形 + 知覚動詞の不定形（与格動作主なし）」と枠組みがはっきりしているのに対し、スロヴェニア語はそのような明確さを欠く。しかも、既述のように、動詞不定形の *slišati* と *videti* が *biti* の人称形と共起する例は決して少なくない。したがって、この 2 つの動詞を中心にする分野が広く薄く知覚動詞以外にまで広がっている構文であり、しかも与格によって動作主が表わされる可能性も完全には排除できない。

人称文に目を向けてみると、チェコ語の *být* + 動詞不定形構文は、不定形で表わされる動詞の対象が主格主語として現れる人称文が増えつつあり、その評価もこの 100 年ほどで誤用から標準語の会話体へと変わった。それに対して、スロヴェニア語ではこの構造をとる例は非常に少なく、しかも動詞不定形は *čutiti*, *slišati*, *videti* のみに限られる特殊かつ稀な構文である。19 世紀の特定の作家が用いているので、作家の文体を特徴づける構文といえるかもしれない。

スロヴェニア語には、チェコ語にその存在が報告されていないもう 1 つのタイプの人称文が認められる。これは動詞不定形が弱化した意味として用いられ、コピュラ *biti* の人称形が形容詞とともに述語を形成する中に入り込む構造である。この人称文動詞不定形はコーパス中で *čutiti*, *slišati*, *videti* に限定される。特に *videti* の例は多い。

一方 *slišati* は *videti* と比べるとずっと少ないが、特定の翻訳文学の中に集中して出現する。原語（英語）の影響、あるいは翻訳者の個性という要素がかかわっている可能性がある。さらに、先行研究にはこの構文を構成する語として形容詞のみが挙げられていたが、そればかりではなく *kot* + 名詞も見られる。このタイプの人称文に含まれる動詞不定形は事実上 *slišati* と *videti* の2つのみであり、その結果としてイディオムとして扱われている。

文法書にはさまざまな役割がある。記述がほぼ完了したといってよいほど進みしかも標準語が設定されている言語であれば、母語話者に対しては、規範とゆれを整理して提示することが大切である。しかし、学習者、すなわち外国語としてその言語を学ぶ人を対象とする場合にそれ以上に重要なのは、辞書を読み込んでも理解しきれない文の構造を解き明かすことであろう。本稿で取り上げた、スロヴェニア語の *biti* + 動詞不定形・無人称構文は、まさに学習者向けの文法解説書においても言及するに値する事項ではないだろうか。スロヴェニア語学の枠内ではそれほど注目されていないとはいえ、上述のように、新聞を読んでいれば毎日いくつか目にする可能性のある構文であり、したがってきわめて稀と断じることができないからであり、しかも、イディオムとして提示するには、動詞不定形の語彙的意味がまとまりを欠くために難しいからである。

注

- 1 太字と下線は筆者が付した。以下の例文も同様である。
- 2 再帰受動態は動作の受け手が主格形をとり形式上の主語となる。したがって、*Cela Praga se je videla.* という訳文が想定される。しかし、スロヴェニア語には動作の受け手が対格形として現れる無人称の再帰受動態構文が標準語の会話体に存在することが知られている。スタンコウスカはこちらの文体を選択したために動作の受け手 (*cela Praga*) が対格で、動詞述語のL分詞形が *videlo* と中性単数形で表わされている。
- 3 本稿では *být* + 動詞不定形で「～しに行く」を表わす構文 (*Petr byl chytat ryby.* 「ペトルは魚釣りに行った」(Karlík 2016: 24–25))は除外する。口語に観察されるこの構文は、スロヴェニア語では一様に「*iti* + 目的分詞」に置き換えられることが明白だからである (Stankovska 2013: 26)。したがって、スロヴェニア語の *biti* + 動詞不定形構文の諸特徴を明らかにするという本稿の主旨からはずれると判断した。
- 4 与格目的語を支配する *rozumět* の含まれる *být* + 動詞不定形構文に関しては、筆者の調べた限りではどの先行研究においても言及がない。しかし、チェコ語コーパスに1例のみ以下の例が見つかった。パイロットと管制官とのやりとりで、管制官の発したことばである。

Věž: „Zopakovat to poslední, **nebyl rozumět** výsledek.“

「最後のをもう1度繰り返すように。結果がわからなかった」(Lidové noviny) <<https://kontext.korpus.cz>> (July.2017)

- 5 ただし Stankovska 2013 では、文構造と文体にまで踏み込んでチェコ語の *být* + 動詞不定形構文に言及した。本稿でまとめた内容とおおむね一致するが、*vidět* と *slyšet* の2つの動詞には、口語で1人称および2人称の *být* の活用形とも結びつく人称文があり、受動を意味すると紹介している (Stankovska 2013: 27–28)。
- 6 ここでポゴレツの述べる叙法的意味とは1つに限らない。もっとも多いのは「しなければならない」としているが (Pogorelec 2011: 433)、この文構造は他の意味、たとえば可能性をも意味しうることを否定していない。
- 7 当然、これらの動詞の不定形と *biti* の人称形が共起してはいるが、述語として機能する *mogoče* 「できる」や *treba* 「する必要がある」なども用いられている次のような文は抽出された文に目を通した上で排除した。
- Ne vedo, ali Bog je, ker tega **ni mogoče spoznati**.
「神がいるかどうかはわかっていない、そんなことは知ることができないからだ。」
Pravo obliko **je treba poznati**, ker oblika je jedro!
「正しい形態を知る必要がある。形態が核なのだ！」
- 8 (18) と (23) は中性名詞単数の主格と対格が同じ形態なので、人称文の可能性もある。しかし、本稿では、形態からはどちらの可能性も考えられる文は無人称文として扱う。

参考文献

- AG: František Štíha et al. 2013. *Akademická gramatika spisovné češtiny*. Praha: Academia.
- Čechová, Marie et al. 1996. *Čeština—řeč a jazyk*. Praha: ISV.
- Gebauer, Jan. 1904. *Příruční mluvnice českého pro učitele a studium soukromé. vydání druhé, opravené*. Praha: UNIE.
- Godec Soršak, Lara. 2013. Glagoli z oslavljenim pomenom v Slovarju slovenskega knjižnega jezika. *Slavistična revija* 61 št.3: 508–522.
- Greenberg, Marc L. 2008. *A Short Reference Grammar of Slovene*. München: Lincom Europa.
- Havránek, Bohuslav a Alois Jedlička. 1981. *Česká mluvnice*. Praha: SPN.
- Herrity, Peter. 2000. *Slovene: a comprehensive grammar*. London & New York: Routledge.
- Jesenovec, France. 1969. Raba nedoločnika. *Jezik in slovstvo*, letnik 14, št. 2: 33–37.
- Karlík, Petr. 2016. Absentiv. In: Petr Karlík et al. (eds.) *Nový encyklopedický slovník I*, 24–25. Praha: Nakladatelství Lidové noviny.
- Lečič, Rada. 2012. *Basic Grammar of the Slovene Language: language manual*. trans. Oliver Currie in Martina Ožbet. Cerkno: Gaya.
- MČ: František Daneš et al. (eds.) 1987. *Mluvnice češtiny 3. Skladba*. Praha: Academia.

- Piper, Predrag. 2009. Slovenski jezik 3. Skladnja. In: Предраг Пипер (ред.) *Југословенски језици: граматичке структуре и функције*, 300–370. Београд: Београдска књига.
- PM: Petr Karlík et als. (eds.) 1995. *Průruční mluvnice češtiny*. Praha: NLN.
- Pogorelec, Breda. 2011. Zgodovinski pregled vloge dativa v prostem stavku v slovenskem knjižnem jeziku. In: Breda Pogorelec. *Zgodovina slovenskega knjižnega jezika: jezikoslovni spisi I*, 431–438. Ljubljana: ZRC, ZRC SAZU.
- Porák, Jaroslav. 1962. Je vidět Sněžku / je vidět Sněžka. *Naše řeč* 45, č. 1-2: 1–8.
- Porák, Jaroslav. 1967. *Vývoj infinitivních vět v češtině*. Praha: UK.
- SS: Anton Bajec et al. 1964. *Slovenska slovnica. Druga popravljena izdaja*. Ljubljana: DZS.
- SSKJ2: 2014. *Slovar slovenskega knjižnega jezika. Druga, dopolnjena in deloma prenovljena izdaja*. Ljubljana: Inštitut za slovenski jezik Frana Ramovša ZRC SAZU.
- Stankovska, Petra. 2009. *Češka slovnica za bohemiste*. Ljubljana: Znanstvena založba Filozofske fakultete.
- Stankovska, Petra. 2013. *Češka skladnja*. Ljubljana: Znanstvena založba Filozofske fakultete.
- Šmilauer, Vladimír. 1947. *Novočeská skladba*. Praha: Ing. Mikuta.
- Toporišič, Jože. 2000. *Slovenska slovnica. Četrta, prenovljena in razširjena izdaja*. Maribor: Obzorja.
- Trávníček, František. 1951. *Mluvnice spisovné češtiny. Část II. Skladba*. Praha: Slovanské nakladatelství.

参照コーパス

- Inštitut za slovenski jezik Frana Ramovša ZRC SAZU. *Nova beseda*—Besedilni korpus na Inštitutu za slovenski jezik Frana Ramovša ZRC SAZU. http://bos.zrc-sazu.si/s_beseda3.html [accessed June.2018]

**Posebnosti slovenske stavčne konstrukcije *biti* + *nedoločnik*
—z vidika češke paralelne konstrukcije—**

Kumiko KANAZASHI

Stavčna konstrukcija *biti* + *nedoločnik* je v slovenščini obrobjen pojav in se malo obravnava, zato njene posebnosti niso dobro znane. Nasprotno se paralelna konstrukcija v češčini piše v mnogih člankih in slovnica. V sodobni češčini konstrukcija *být* + *nedoločnik* izraža možnost, tvorijo pa jo nedoločniki glagolov spoznavanja in zaznavanja. V knjižnem jeziku obstajajo večinoma brezosebni stavki (npr. *Bylo vidět celou Prahu.*), v pogovornem jeziku pa se več raba osebnih stavkov (npr. *Byla vidět celá Praha.*).

Konstrukcija *biti* + *nedoločnik* tudi v sodobni slovenščini izraža možnost, vendar nedoločniki, ki tvorijo to konstrukcijo, niso omejeni na glagole spoznavanja in zaznavanja. Pri preiskavi korpusa slovenskega jezika *Nova beseda* smo v nedoločniku našli naslednje glagole: *brati*, *dobiti*, *najti*, *prebirati*, *prebrati*, *upoštevati* itd. (npr. *Zdaj jih ni nikjer niti videti niti brati*). Na podlagi raziskave tega korpusa ugotavljamo, da je brezosebnih stavkov z nedoločnikom *videti* in *slišati* razmeroma mnogo (npr. *Bilo je videti celo Prago./ Zvon je bilo slišati na gradu.*), osebnih stavkov, kakršni so navedeni v češčini, pa je zelo malo. V slovenščini obstaja drug tip osebnih stavkov kot v češčini, tj. *biti* + *nedoločnik* z *oslabljenim pomenom*, in glagola v nedoločniku sta predvsem *videti* in *slišati* (npr. *Pot je videti dobra. / Toda francoski predsednik je slišati odločen.*).